

清心庵

泉鏡花

青空文庫

米と塩とは尼君が市まちに出で行きたまうとて、庵いおりに残したまいたれば、摩耶まやも予も餓ううることなかるべし。もとより山中の孤家ひとりつやなり。甘きものも酔よきものも摩耶は欲しからずという、予もまた同じきなり。

柄長く椎しいの葉ばかりなる、小ちいき鎌を腰にしつ。籠かごをば糸つけて肩かたに懸かけ、袷あはせ短じかに草履穿はきたり。かくてわれ庵を出では、午ごの時過とぐる比ころなりき。

籠かごに遠とほき市いち人びとは東雲しののめよりするもあり。まだ夜明けきたざるに

るあり。芝しば茸たけ、松茸、しめじ、松露など、小笹おやせの蔭、芝の中、
雑木の奥、谷間たにあいに、いと多き山なれど、狩る人の数もまた多し。
昨日一昨日きのうおととい雨降りて、山の地つち湿りたれば、茸きのこの獲物さこそとて、
朝霧の晴れもあえぬに、人影山に入乱れつ。いまはハヤ朽葉の下
をもあさりたらむ。五七人、三五人、出盛りたるが断続して、群
れては坂を帰りゆくに、いかにわれ山の庵なに馴なれて、あたりの地
味にくわしとて、何ほどのものか獲らるべき。

米と塩とは貯かけひえたり。筧かけひの水はいと清ければ、たとい木の実ひ
個とつ獲とずもあれ、摩耶も予も餓うることなかるべく、甘きものも酢
きものも渠かれはたえて欲うしからずという。

されば予たけが茸狩らむとして来きたりしも、毒あじわいなき味の甘いきを獲て、

煮て食わむとするにはあらず。姿のおもしろき、色のうつくしきを取りて歸りて、見せて樂ませむと思ひしのみ。

「爺や、この茸は毒なんか。」

「え、お前様、そいつあ、うっかりしようもんなら殺られますぜ。紅茸べにたけといつてね、見ると綺麗きれいでさ。それ、表は紅を流したよう
で、裏はハア真白まっしろで、茸きのこの中じゃあ一番うつくしいんだけど、
食べられましねえ。あぶれた手合が欲しそうに見ちやあ指をくわ
えるやつでね、そいつばツかりや塩を浴びせたって埒明らちきませぬ
じゃ、おツぽり出してしまわっせえよ。はい、」

といいかけて、行かむとしたる、山番の爺じじはわれらが庵を五六
町隔てたる山寺の下に、小屋かけてただ一人住みたるなり。

風吹けば倒れ、雨露うろに朽ちて、卒堵婆そとばは絶えてあらざれど、傾きたるまま苔蒸こけむすままに、共有地の墓いまなお残りて、松の蔭の処々に数多く、春夏冬は人もこそ訪とわね、盂蘭盆うらぼんにはさすがに詣もつで来る縁者もあるを、いやが上に荒れ果てさして、霊地の跡を空しゆうせじとて、心ある市まちの者より、田畑少し附属して養いおく、山番の爺は顔丸まるく、色煤すすびて、眼まなこは窪み、鼻円まるく、眉は白くなりて針金のごときが五六本短く生おいたり。継はぎの股もも引膝ひざまでして、毛脛けずね細く瘡やせたれども、健かに。谷を攀よじ、峰にのぼり、森の中をくぐりなどして、杖つえをもつかで、見めぐるにぞ、盗ぬす人の来て林に潜むことなく、わが庵も安らかに、摩耶も頼母たのもしく思うにこそ、われも懐ししと思いたり。

「食べやしないんだよ。爺や、ただ玩弄おもちゃにするんだから。」

「それならば可ようござすが。」

爺は手桶ておけひっさを提ひげいたり。

「何でもこうその水みづの中へうつして見るとの、はつきりと影の映るやつは食べられますで、茸きのこの影がぼんやりするのは毒がありま
すじゃ。覚えておかつしやい。」

まめだちていう。頷うなずきながら、

「一杯吞のどましておくれな。咽喉のどが渴かわいて、しようがないんだから

。」

「さあさあ、いまお寺から汲くんで来たお初穂だ、あがんなさい。」

掬むすばむとして猶た予めらいぬ。

「柄杓ひしゃくがないな、爺や、お前とこン処まで一所に行ゆこう。」

「何が、仏様へお茶を煮てあげるんだけんど、お前様のきれいなお手だ、ようごす、つつこんで吞まつしやいさ。」

俯うつむ向きたなそこすくぎざま掌たなそこすくに掬くいてのみぬ。清涼きりやう掬くすべし、この水の味はわ

れ心得こころえたり。遊山ゆうざんの折々かの山寺の水試たまみたるに、わが家

のそれと異ことならずよく似たり。実げによき水ぞ、市まちなか中なかにはまた類たぐいあ

らじと亡き母のたまいき。いまこれをはじめならず、われもまた

しばしばくらべ見つ。摩耶と二人いま住まえる尼君の庵なる筧たきの

水もその味あじわいこれと異なるなし。悪熱のあらむ時三ツの水のいずれを

か掬むすばんに、わが心地いかならむ。忘るるばかりのみはてたり。

「うんや遠慮さつしやるな、水だ。ほい、強つよいるにも当らぬかの。」

おお、それからいまのさき、私が田圃たんぼから帰りがけに、うつくしい女衆が、二人づれ、丁稚でっちが一人、若い衆が三人で、駕籠かごを昇かいてそろそろとやって来おつた。や、それが空駕籠じやつたわ。もしもし、清心様とおっしゃる尼様のお寺はどちらへ、と問いくさる。はあ、それならと手を取るように教えてやつけが、お前様用でもないかの。いい加減に遊ばっしゃたら、迷児まいごにならずけえに帰らっしゃいよ、奥様が待ってござろうに。」

と語りもあえず歩み去りぬ。摩耶が身に事なきか。

まい茸だけはその形細き珊瑚さんごの枝に似たり。軸白くして薄紅うすべにの色さしたると、樺かばいろ色なると、また黄なると、三ツ五ツはあらむ、芝茸はわれ取つて捨てぬ。最も数多く獲たるは紅茸なり。

こは山蔭の土の色鼠に、朽葉黒かりし小暗おぐらきなかに、まわり一抱かかえもありたらむ榎えのきの株を取巻きて濡色くれないの紅したたるばかり塵ちりも留めず地つちに敷きて生おいたるなりき。一ツずつそのなかばを取りしに思いがけず真黒なる蛇の小さきが紫の蜘蛛くも追かい駈かけて、縦横たてよこに走りたれば、見るからに毒々しく、あまれるは残して留やみぬ。

松の根つくばに踞つくばいて、籠かごのなかさしのぞく。この茸きのこの数も、誰たがためにか獲たる、あわれ摩耶は市に帰るべし。

山番の爺おやがいたるごとく駕籠かごは来て、われよりさきに庵いんの枝し

折戸おりどにひたと立てられたり。壮佼わかももの居て一人は棒おとがに頤つつき、他は下に居て煙草たばこのみつ。内にはうらわかきと、冴さえたと、しめやかなる女の声して、摩耶のものいうは聞えざりしが、いかでわれ入らるべき。人に顔見するがもの憂ければこそ、摩耶も予もこの庵いほには籠こもりたれ。面合おもてすに憚はばかりたれば、ソと物の蔭かげになりつ。こときさらに隔へりたれば窃ぬすみ聴かむよしもあらざれど、渠かれら等空駕籠からこは持て来たり、大方は家よりして迎むかいに来りしものならむを、手を空しゆうして帰るべしや。

一同が庵を去らむ時、摩耶もまた去らでやある、もの食わでもわれは餓えまじきを、かかるもの何かせむ。

打うちこぼし投げ払いし籠の底に残りたる、ただ一ツありし初は茸つたけ

の、手の触れしあとの錆つきて斑らに緑晶の色染みしさえあ
 じきなく、手に取りて見つつわれ俯向きぬ。

顔の色も沈みけむ、日もハヤたそがれたり。濃かりし蒼空も
 淡くなりぬ。山の端に白き雲起りて、練衣のごとき艶かなる月
 の影さし初めしが、刷いたるよう広がりて、墨の色せる巔と連り
 たり。山はいまだ暮ならず。夕日の余波あるあたり、薄紫の雲も
 見ゆ。そよとばかり風立つままに、むら薄の穂打靡きて、肩の
 あたりに秋ぞ染むなる。さきには汗出でて咽喉渴くに、爺にもと
 めて山の井の水飲みたりし、その冷かさおもい出でつ。さる時の
 我といまの我と、月を隔つる思いあり。青き袷に黒き帯して瘡せ
 たるわが姿つくづくとしながら寂しき山に腰掛けたる、何人

もかかる状は、やがて皆孤児みなしごになるべき兆きざしなり。

小笹こささざわざわと音したれば、ふと頭かしらを擡もたげて見ぬ。

やや光の増し来れる半輪きたの月を背に、黒き姿たきぎして薪たきぎをば小脇こわきに

かかえ、崖がけよりぬツくと出でて、薄すすきはら原あらわに顕あらわれしは、まためぐ

りあいたるよ、かの山番の爺おやなりき。

「まだ帰らつしやらねえの。おお、薄ら寒くなりおつた。」

と眩つふやくがごとくにいいて、かかる時、かかる出会の度々なれば、

わざとには近寄らで離れたるままに横よこぎりて爺は去りたり。

「千ちゃん。」

「え。」

予は驚おどきて顧みかえりぬ。振返れば女居たり。

「こんな処に一人で居るの。」

といいかけてまず微笑^{ほほえ}みぬ。年紀^{とし}は三十^{みそじ}に近かるべし、色白く

妍^{かおよ}き女の、目の働き活^{いきいき}々として風采^{とりなり}の狭^{きやん}なるが、扱^{しご}帯^ききりりと

裳^{もすそ}を深く、凜^{りり}々しげなる扮装^{いでたち}しつ。中ざしキラキラとさし込み

つつ、円鬚^{まるまげ}の艶^{つや}かなる、旧わが居たる町に住みて、亡き母上と

も往来^{ゆきき}しき。年紀^{とし}少^{わか}くて孀^{やもめ}になりしが、摩耶の家^やに奉公するよし、

予もかねて見知りたり。

目を見合せてさしむかいつ。予は何事もなく頷^{うなず}きぬ。

女はじつと予を瞻^{みまも}りしが、急にまた打笑えり。

「どうもこれじゃあ密通^{まおとこ}をしようという顔じゃあないね。」

「何をいうんだ。」

「何をもないもんですよ。千ちゃん！ お前様まえさんは。」

いいかけて渠かれはやや真顔まへんになりぬ。

「一体お前様まあ、どうしたというんですね、驚いたじゃアありませんか。」

「何をいうんだ。」

「あれ、また何をじゃアありませんよ。盗人ぬすびとを捕えて見ればわ

が兎こなりか、内の御新造ごしんぞさま様のいい人は、お目に懸かるとお前様まえさんだもの。驚くじゃアありませんか。え、千ちゃん、まあ何でも可いいか

ら、お前様ひとつ何とかいって、内の御新造様を返して下さい。

裏店うらだなの媽かか々々が飛出したって、お附合五六軒は、おや、とばかり

で騒ぐわねえ。千ちゃん、何だってお前様、殿様のお城か、内の

お邸やしきかという家の若御新造が、この間の御遊山から、直ぐにどこへいらつしやつたかお帰りが無い、お行方が知れないというのじやアありませんか。

ぱつとしたら国中の騒動になりますわ。お出入でいりが八方に飛出すばかりでも、二千や三千の提ちようちん灯かは駈かけまわろうというもんです。まあ察しても御覧なさい。

これが下したじた々たのものならばさ、片かたはだぬぎ膚だ脱ぬぎの出刃庖丁の向う顧はちま巻きか何かで、阿魔あま！ とばかりで飛出す訳じやアあるんだけれど、何しろねえ、御身分が御身分だから、実は大きな声を出すことも出来ないで、旦那だんなさま様さまは、蒼あおくなつていらつしやるんだわ。

今朝のこつたね、不断いつぱち一八いちぱちに茶の湯のお合手にいらつしやつ

た、山のお前様、尼様の、清心様がね、あの方はね、平時いづもはお前様、八十にもなっていてさ、山から下駄穿げたばきでしやんしやんと下りていらつしやるのに、不思議と草鞋穿わらじばきで、饅頭まんじゅう笠がさか何かで遣やつて見えてさ、まあ、こうだわ。

(御宅の御新造様さんは、私わしん処ところに居ますで案じさつしやるな、したがな、また旧もとなりにお前の処へは来ないからそう思わつしやいよ)。

と好すきなことをいって、草鞋も脱がないで、さつさつ去いつておしまいなすつたじやないか。

さあ騒ぐまいか。あつちこち聞きあわせると、あの尼様はこの四五日前から方々の帰依者きえしやン家とこをずっと廻まわつて、一々、

(私^{わし}はちつと思ひ立つことがあつて行脚^{あんぎや}に出ます。しばらく逢
わぬでお暇^{いとまぎい}乞^{まごい}じや。そして言つておくが、皆の衆決して私^{わし}が
留守へ行つて、戸をあけることはなりませんぞ。)

と、そういつておあるきなすつたそうさね、そして肝心のお邸
を、一番あとまわしだらうじやあないかえ、これも酷^{ひど}いわね。」

三

「うつちやつちやあおかれない、いえ、おかれないどころじやあ
ない。直ぐお迎いをするので、お前^{まえさん}様、旦那に伺うとまあど
うだろう。」

御遊山を遊ばした時のお伴のなかに、内々清心庵あまでらにいらつしやることを突留めて、知ったものがあつて、先せんにもう旦那様に申しあげて、あら立ててはお家の瑕瑾かきんというので、そつとこれまでにお使つかいが何遍も立ったというじゃありませんか。

御新造様は何といつても平氣でお帰り遊ばさないというんだもの。ええ！ 飛んでもない。何とおつしやつたつて引張ひっぱつてお連れ申しましょうとき、私とお仲さんというのが二人で、男衆を連れてお駕籠を持つてさ、えツちらおツちらお山へ来たというもんです。

尋ねあてて、尼あまさん様の家とこへ行つて、お頼み申します、とやると、お前様。

(誰方どなた、)

とおつしやつて、あの薄暗いなかにさ、胸の処から少し上をお出し遊ばして、真まっしろ白しろな細いお手の指が五本衝ついたて立たの縁へかかったのが、はつきり見えたわ、御新造様だあね。

お髪ぐしがちいつと乱れてさ、藤色の袷あわせで、ありやしかも千ちゃん、この間お出かけになる時に私が後うしろからお懸け申したお召めしだろうじやアありませんか。凄すごかったわ。おやといつて皆みんな後ごじさりをしましたよ。

驚おどろきましたね、そりや旧もとのことをいえば、何だけれど、第一お前様、うちの御新造様とおつしやる方がさ、頼みます、誰方どなたということを、この五六年じゃあ、もう忘れておしまい遊ばしただろ

うと思つたもの。

誰だじやあございませぬ。さて、あなたは、と開き直つていうことになるよ、

(また、^{むかい}迎かい。)

といつて、笑つていらつしやるというもんです。いえまたも何も、滅相な。

(皆御^{みんな}苦勞ね。だけれど私あまだ帰らないから、かまわないでおくれ。ちつとやすんだらお歸りだといひ。お湯^{ぶう}でもあげるんだけれど、それよりか庭のね、^{かけひ}笥の水が大層々々おいしいよ。)

なんて澄^{すま}していらつしやるんだもの。何だか私たちああんまりな御様子に呆^{あき}れツちまつて、ぼんやりしたの、こりやあまあ魅^{つま}ま

れてでもないかないかしらと思つた位だわ。

いきなり後うしろからお背なせを推して、お手を引張ひっぱつてというわけにも

ゆかないのでね、まあ、御挨拶ごあいさつ半分はんぶんに、お邸はアノ通り、御身

分は申すまでもございませぬ。お実家さとには親御様お両方ふたかたともお

達者たつしやうなり、姑しゅうとこ御と申すはなし、小姑一人にんございますか。旦那

様は御存じでもございませう。そうかといつて御気分がお悪い

でもなく、何が御不足で、尼になんぞなろうと思し召すのでござ

いますと、お仲さんと二人両方から申しますとね。御新造様が、

(いいえ、私は尼になんぞなりはしないから。)

(へえ、それではまたどう遊ばしてこんな処に、)

(ちつと用があつて、)

とおつしやるから、どういふ御用でツて、まあ聞きました。

(そんなこといわれるのがうるさいからここに居るんだもの。可いから、お帰り。)

とこんな御様子なの。だって、それじゃあ困るわね。帰るも帰らないもありやあしないわ。

じゃあまあそれはたつてお聞き申しませんまでも、一体此家ここにはお一人でございますかつて聞くと、

(二人。)とこうおつしやった。

さあ、黙つちやあいられやしない。

こうこういふわけですから、尼様と御一所ではなからうし、誰方とお二人でというかね、

(可愛い児ことさ、)とお笑いなすった。

うむ、こりや仔細しさいのないこった。華族様の御台様みだいさまを世話で
暮し遊ばすという御身分で、考えてみりやお名もまや様で、夫人
というのが奥様のことだといってみれば、何のことはない、大倭やまと
文庫の、御台様さね。つまり苦勞のない摩耶夫人様まやぶにんさまだから、大方
洒落しやれに、ちよいと雪山せつせんのという処をやつて、御覽遊ばすのであ
ろう。凝つたお道楽だ。

とまあ思つちやあ見たものの、千ちゃん、常々の御氣象が、そ
んなんじやあおあんなさらない……でしよう。

可愛い児とおつしやるから、何ぞ尼寺でお氣に入った、かなり
やでもお見付け遊ばしたのかしらなんと思つてさ、うかがつて驚

いたのは、千ちゃんお前様まえさんのことじゃあないかね。

(いつでもうわさをしていたからお前たちも知っておいでだろう。蘭らんや、お前が御存じの。)

とおっしゃったのが、何と十八になる男だもの、お仲さんが吃く驚びっくりしようじゃあないか。千ちゃん、私も久しく逢わないで、き

のうきようのお前様は知らないから——千ちゃん、——むむ、お妙たえさんの児この千ちゃん、なるほど可愛い児だと実をいえば、はじめは私もそれならばと思つたがね、考えて見ると、お前様、いつまで、九ツや十で居るものか。もう十八だとそう思つて驚いたよ。

何の事はない、密まおとこ通とこだね。

いくら思案をしたつて御新造様は人の女房さ。そりやいくら邸

の御新造様だつて、何だつてやつぱり女房だもの。女房がさ、千ちゃん、たとい千ちゃんだつて何だつて、男と二人で隠れていりや、何のことはない、怒つちやあいけませんよ、やつぱり何さ。

途方もない、乱暴な小僧こぞツ児この癖こに、失礼な、未恐しい、見下げ果てた、何の生意気なことをいつたつて私が家とこに今でもある、アノ籐とうで編とんだ茶台ちやだいはどうだい、嬰ねんねえ児こが這はつてあるいて玩おも弄ちやにして、チュツチュツか嚙かんで吸すつた齒形はがついて残のこつてら。叱のたまり倒たふしてと、まあ、怒おこつちやあ嫌きらよ。」

四

「それが何も、御新造様さえ素直に帰るといつて下さりや、何でもないことだけれど、どうしても帰らないとおつしやるんだもの。

お帰り遊ばさないたって、それで済むわけのものじゃあござい
ません。一体どう遊ばすおぼしめし 思 召でございます。

(あの児こと一所に暮そうと思つて、)

とばかりじゃあ、困ります。どんなになさいました処で、千ち
やんと御一所において遊ばすわけにはまいりません。

(だから、此家ここに居るんじゃあないか。)

その此家ここは山の中の尼寺じゃありませんか。こんな処にあの
児と二人おいで遊ばしては、世間で何と申しましょう。

(何といわれたって可いいんだから、)

それでは、あなた、旦那様に済みますまい。第一親御様なり、また、

(いいえ、それだからもう一生人づきあいをしないつもりで居る。私^いが分つてるから、可い^いから、お前たちは帰っておしまい、可いから、分つているのだから、)

とそんな分らないことがありますか。ね、千ちゃん、いくら私たちが家来だからって、ものの理は理さ、あんまりな御無理だから種々^{いろいろ}言^いうと、しまいにやあただ、

(だって不可^{いけな}いから、不可^{いけな}いから、)

とばかりおっしゃって果^{はて}しがないの。もうこうなりやどうしたつてかまやしない。どんなことをしてなりと、お詫^{わび}はあとでする

ことと、無理やりにも力づくで、こつちは五人、何の！ あんな御新造様、腕うでづくならこの蘭一人で沢山だわ。さあというと、屹きつと遊ばして、

（何をおしだ、お前達、私を何だと思ふのだい、）

とおつしやるから、はあ、そりやお邸の御新造様だと、そう申し上げると、

（女中たちが、そんな乱暴なことをして済みますか。良人やどなら知らぬこと、両親ふたおやにだって、指一本ささしはしない。）

あれで威勢がおあんなさるから、どうして、屹きつと、おからだがすわると、すくんじまわあね。でもさ、そんな分らないことをおつしやれば、もう御新造様でも何でもなし。

(他人ならばうっちゃっておいでしてくれ。)

とこうでしょう。何てつたつて、とてもいうことをお肯きき遊ばさないお気なんだから仕ようがない。がそれで世の中が済むのじやあないんだもの。

じゃあ、旦那様がお迎むかいにお出で遊ばしたら、

(それでも帰らないよ。)

無理にも連れようと遊ばしたら、

(そうすりや御身分にかかわるばかりだもの。)

もうどう遊ばしたというのだろう。それじゃあ、旦那様と千ちやんと、どちらが大事でございますつて、この上のいいようがないから聞いたの。そうするとお前まえ様、

（ええ、旦那様は私が居なくつても可いけれど、千ちゃんは一所に居てあげないと死んでおしまいだから可哀相かわいそうなもの。）

とこれじゃあもう何にもいうことはありませんわ。ここなの、ここなんだがね、千ちゃん、一体こりや、ま、お前さんどうしたというのだね。」

女はいいかけてまた予が顔をみまも瞻りぬ。予はほと一呼吸いきついたり。

「摩耶さんが知っておいでだよ、私は何にも分らないんだ。」

「え、分らない。お前さん、まあ、だって御自分のことが御自分に。」

予は何とかいうべき。

「お前、それが分る位なら、何もこんなにやなりやしない。」

「ああれ、またここでもこうだもの。」

五

女はまたあらためて、

「一体詮じ詰めた処が千ちゃん、御新造様と一所に居てどうしようというのだね。」

さることはわれも知らず。

「別にどうってことはないんだ。」

「まあ。」

「別に、」

「まあさ、御飯をたいて。」

「詰つまらないことを。」

「まあさ、御飯をたいて、食べて、それから、」

「話をしてるよ。」

「話をして、それから。」

「知らない。」

「まあ、それから。」

「寝っちまうさ。」

「串じょうだん戯ごじゃあないよ。そしてお前まえ様、いつまでそうして

るつもりなの。」

「死ぬまで。」

「え、死ぬまで。もう大抵じゃあないのね。まあ、そんならそうとして、話は早い方が可いが、千ちゃん、お聞き。私だつて何も彼家あすこへは御譜代というわけじゃあなしさ、早い話が、お前さんのおおつかさん母様とも私あ知合だつたし、そりや内の旦那より、お前さんの方が私やまつたくの所、可愛いよ。可いかね。

ところでいくらお前さんが可愛い顔をしてるたつて、情婦いろこしらを拵とえたつて、何もこの年とし紀しをしてものの道理がさ、私がやつかむにも当らずか、打明けた所、お前さん、御新造様と出来たのかね。え、千ちゃん、出来たのならそのつもりさ。おたのし楽しみ！ てなことひきさがで引退ひきさがろうじやあないか。不思議で堪たまらないから聞くんだが、どうだねえ、出来たわけかね。」

「何がさ。」

「何がじゃあないよ、お前さん出来たのなら出来たで可いじゃあないか、いっておしまいよ。」

「だって、出来たって分らないもの。」

「むむ、どうもこれじゃあ拵えようという柄がらじゃあないのね。いえね、何も忠義だてをするんじゃないが、御新造様があんまりだからツイ私だつてむつとしたわね。行ゆきがかりだもの、お前さん、この様子じゃあ皆みんなこりやアノ児このせいだ。小児こどもの癖くせにいきすぎな、いつのまにませたろう、取っつかまえてあやまらせてやろう。私ならぐうの音ねも出させやしないと、まあ、そう思ったもんだから、ちつとも言分は立たないし、跋ばつも悪しで、あつちやアお仲さんに

まかしておいて、お前さんを探して来たんだがね。

逢つて見ると、どうして、やっぱり千ちゃんだ、だつてこの様子でまおとこ密通も何もあつたもんじゃあないやね。何だかちつとも分らないが、さて、内の御新造様と、お前様とはどうしたというのだね。」

知らず、これをもまた何とかいわむ。

「摩耶さんは、何とおいだつたえ。」

「御新造さんは、なかよしの朋ともだち達だつて。」

かくてこそ。

「まつたくそうなんだ。」

かれがえん渠は肯ずる色あらざりき。

「だってさ、何だつてまた、たかがなかの可いお朋達ぐらいで、お前様、五年ぶりで逢つたつて、六年ぶりで逢つたつて、顔を見ると気が遠くなつて、気絶するなんて、人がありますか。千ちゃん、何だつてそういうじゃありませんか。御新造様のお話しては、このあいだ尼寺でお前さんとお逢いなすつた時、お前さんはひきつけ気絶ツちまつたというじゃありませんか。それでさ、御新造様は、あの児こがそんなに思つてくれるんだもの、どうして置いて行ゆかれるものか、なんてすき好きなことをおっしやつたがね、どうしたというのだね。」

げにさることもありしよし、あとにてわれ摩耶に聞きて知りぬ。「だって、何も自分じゃあ気がつかかなかつたんだから、どうい

わけだか知りやしないよ。」

「知らないたつて、どうもおかしいじやありませんか。」

「摩耶さんに聞かきさ。」

「御新造様に聞かきや、やっぱり千ちゃんにお聞かき、とそうおつしやるんだもの。何が何だか私たちにやあちつとも訳がわかりやしない。」

しかり、さることのくわしくは、世に尼君ならで知りたまわじ。

「お前、私達だつて、口じやあ分るようにいえないよ。皆みんなあまさん尼様

が御存じだから、聞かきたきやあの方に聞かきが可いんだ。」

「そらそら、その尼様だね、その尼様が全体分らないんだよ。」

名僧の、智識の、僧正の、何のツても、今時の御出家に、女で

こそあれ、山の清心さんくらいの方はありやしない。

もう八十にもなつておいでなのに、法華經二十八卷を立読たてよみに遊ばして、お茶一ツあがらない御修行だと、他宗の人でも、何でも、あの尼様といやア拝むのさ。

それにどうだろう。お互の情を通じあつて、恋の橋渡をお

しじやあないか。何の事はない、こりや万事人の悪い髪結かみゆいの役

だあね。おまけにお前様、あの薄暗い尼寺を若いもの同士にあけ渡して、御機嫌よう、か何かで、ふいとどこかへ遁にげた日になつ

て見りや、破戒無慙はかいむざんというのだね。乱暴じやあないか。千ちゃん、

尼さんだつて七十八まで行い澄すましていながら、お前さんのために、ありやまあどうしたというのだろう。何か、千ちゃん処ところは尼

さんのお主筋しゆうでもあるのかい。そうでなきや分らないわ。どんな因縁いんげんだね。」

と心籠こめて問う状さまなり。尼君のためなれば、われ少しく語るべし。

「お前も知っておいでだね、母おつかさん上は身を投げてお亡くなんなすつたのを。」

「ああ。」

「ありやね、尼様が殺したんだ。」

「何ですと。」

女は驚きて目を睜みはりぬ。

六

「いいえ、手を懸けたというんじやあない。私はまだ九歳ここのつ時分のことだから、どんなだか、くわしい訳は知らないけれど、母おつか様さんは、お前、何か心配なことがあつて、それで世の中が嫌になりで、くよくよしていらつしやつたんだが、名高い尼様あまさんだから、話をしたら、慰めて下さるだろうつて、私の手を引いて、しかも、冬の事だね。

ちらちら雪の降るなかを山へのぼつて、尼寺をおたずねなすつて、炉ろの中へ何だか書いたり、消したりなぞして、しんみり話をしておいでだったが、やがてね、二時間ばかり経たつてお帰りだつ

た。ちようど晩方で、ぴゅうぴゅう風が吹いてたんだ。

尼様が上あがりかまち 框かまちまで送つて来て、分れて出ると、戸を閉めたの。

少し行ゆきかか懸ると、内で、

（おお、寒さむ、寒。）と不作法な大きな声で、アノ尼様がいったの

が聞えると、母様が立停たちどまつて、なぜだか顔の色をおかえなすつ

たのを、私は小児心こどもごころにも覚えている。それから、しおしおとし

て山をお下りなすつた時は、もうとつぷり暮れて、雪が……みぞれ霽はらになつたらう。

なつたらう。

ふもと麓の川の橋へかかると、鼠色の水が一杯で、ひだをうつて大おお

蛇うねりに蛇うねつちやあ、どうどうツて聞えてき。真ま黒くろな線すじのよう

になつて、横ぶりにびしやびしやと頬ほ辺べたを打つちやあ霽はらが消え

るんだ。一山やま々々になつてゐる柳の枯れたのが、渦を巻いて、それで森しんとして、あかり一ツ見えなかつたんだ。母様が、

(尼になつても、やつぱり寒いんだもの。)

と独ひとりごと言ことのようにおつしやつたが、それつきりどこかへいらつしやつたの。私は目が眩くらんじまつて、ちつとも知らなかつた。

ええ！ それで、もうそれつきりお顔が見られずじまい。年月もうろ覚え。その癖、嫁入をおしの時はちやんと知つてゐるけれど、はじめて逢い出した時は覚えちやあいないが、何でも摩耶さんとはその年から知合つたんだとそう思う。

私はね、母様がお亡くなんなすつたつて、それを承知は出来ないんだ。

そりやものも分つたし、お亡^{なく}なんなすつたことは知ってるが、
どうしてもあきらめられない。

何の詰^{つま}らない、学校へ行つたつて、人とつきあつたつて、母様
が活^いきてお帰りじゃあなし、何にするものか。

トそう思うほど、お顔が見たくつて、堪^{たま}らないから、どうしま
しようどうしましょう、どうかしておくれな。どうしてもして下さ
いなつて、摩耶さんが嫁入をして、逢えなくなつてからは、なお
の事、行つちやあ尼^{あまさん}様を強請^{ねだ}つたんだ。私あ、だだを捏^こねたん
だ。

見ても、何でも分つたような、すべて承知をしているような、
何でも出来るような、神^{じんずう}通でもあるような、尼様だもの。どう

にかしてくれないことはなかりうと思つて、そのかわり、自分の思つてゐることは皆打あけて、いつて、そうしちやあ目を瞑つて尼様に暴れたんだね。

「そういうわけさ。」

他に理窟ほかもなんにもない。この間も、尼さまとこん処へ行つて、例のをやつてゐる時に、すつと入つておいでなのが、摩耶さんだった。

私は何とも知らなかつたけれど、気が着いたら、尼様が、頭を撫なでて、

（千坊や、これで可いいのじや。米も塩も納屋にあるから、出してたべさしてもらわつしやいよ。私わしはちよつと町まで托鉢たくはつに出懸けます。大人しくして留守をするのじやぞ。）

とそうおつしやったきり、お前、草鞋わらじを穿はいてお出懸でかけで、戻つておいでのようすもないもの。

摩耶さんは一所に居ておくれだし、私はまた摩耶さんと一所に居りや、母様のこと、どうにか堪忍が出来るのだから、もう何もかもうつちやつちまつたんさ。

お前、私にだって、理窟は分りやしない。摩耶さんも一所に居りや、何にも食べたくも何ともない、とそうおいだもの。気が合つたんだから、なかがいいお朋ともだち達たちだろうよ。」

かくいいし間まにいろいろのことこそ思いたれ。胸痛むねいたくなりたれば俯向うつむきぬ。女かたわらが傍わらに在るも予はうるさくなりたり。

「だから、もう他ほかに何ともいいようは無いのだから、あれがああ

だから済まないの、義理だの、済まないじゃあないかなんて、もう聞いちやあいけない。人とさ、ものをいつてるのがうるさいから、それだから、こうしてるんだから、どうでも可いから、もう帰っておくれな。摩耶さんが帰るとおいしいなら連れてお帰り。大方、お前たちがいうことはお肯ききじやあるまいよ。」

予はわが襟を搔かき合せぬ。さきより踞つくばいたる頭次第かしらに垂れて、芝生に片手つかんずまで、打沈みたりし女の、この時ようよう顔をばあげ、いま更にまた瞳を定めて、他のこと思っている、わが顔をみまも瞻まもるよと覚えしが、しめやかなるものいいしたり。

「可ようござんす。千ちゃん、私たちの心とは何かまるで変つてるようで、お言葉は腑ふに落ちないけれど、さつきもあんなにやア言

ったものの、いまここへ、尼様がおいで遊ばせば、やっぱりつむりが下るんです。尼様は尊く思いますから、何でも分った仔細しさいがあつて、あの方の遊ばす事だ。まあ、あとでどうなろうと、世間の人がどうであろうと、こんな処はとても私たちの出る幕じゃない。尼様のお計らいだ、どうにか形かたのつくことでござんしようと、そうまあねえ、千ちゃん、そう思つて帰ります。

何だか私もぼんやりしたようで、気が変になつたようで、分らないけれど、どうもこうした御様子じゃあ、千ちゃん、お前まえ様と、御新造ごしんぞう様と一ツお床でおよつたからつて、別に仔細はないように、ま私は思います。見りやお前様もお浮きでなし、あつちの事が気にかかりますから、それじゃあお分れといたしましょう。

あのね、用があつたら、そツと私ンとこまでおつしやいよ。」

とばかりに渠かれは立ちあがりぬ。予が見送ると目を見合せ、

「小憎らしいねえ。」

と小戻りして、顔を斜ななめにすかしけるが、

「どれ、あのくらいな御新造様を迷わしたは、どんな顔だ、よく見よう。」

といいかけて莞爾にっことしつ。つと行く、むかひに登あしおと音して、一

行四人の人影見ゆ。すかせば空駕籠釣かごらせたり。渠等は空しく帰るにこそ。摩耶われを見棄てざりしと、いそいそと立つたりし、肩に手をかけ、下に居おらせて、女は前に立塞たちふさがりぬ。やがて近づく渠等の眼より、うたてきわれをば庇かばいしなりけり。

熊笹のびて、薄すすぎの穂、影さすばかり生おいたれば、ここに人あり
 と知らざる状さまにて、道を折れ、坂にかかり、松の葉のこぼるるあ
 たり、目の下近く過よぎりゆく。女はその後を追いたりしを、忍びや
 かにぞ見たりける。駕籠のなかにもこのそありけれ。設もうけの蒲団敷
 重ねしに、摩耶はあらで、その藤色の小袖かおりのみ薫床しく乗せられ
 たり。記念かたみにとて送りけむ。家土産いえつとにしたるなるべし。その小袖
 の上に菊の枝置き添えつ。黒き人影あとさきに、駕籠ゆらゆらと
 釣持あたらちたる、可惜あたらその露をこぼさずや、大輪おおりんの菊の雪なすに、
 月の光照り添はるいて、山路に白くちらちらと、見る目遥はるかに下り行き
 ぬ。

見送り果てず引返して、駈かけ戻りて枝折戸しおりどい入りたる、庵のなか

は暗かりき。

「唯今！」

と勢よくいきおい 框かまちに踏懸け呼びたるに、答こたへはなく、衣きぬの氣勢けはいして、白しろき手をつき、肩のあたり、衣紋えもんのあたり、乳ちのあたり、衝立ついたての蔭かげに、つと立ちて、烏羽玉うばたまの髪かみのひまに、微笑ほほえみむかえし摩耶まゝが顔かほ。笄かぎひの音ねして、叢くさむらに、虫鳴むしなみく一ツ聞えしが、われは思わず身の毛よだちぬ。

この虫の声、笄かぎひの音、框かまちに片足かけたる、その時、衝立ついたての蔭かげに人見えたる、われはかつてかかる時、かかることにいであ 出い会あいぬ。母上ははか、摩耶まゝなりしか、われ覚えておらず。夢ゆめなりしか、知らず、前まへの世よのことなりけむ。

明治三十（一八九七）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

初出：「新著月刊」

1897（明治30）年7月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

清心庵

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>